

新領地を求めた

大野藩の挑戦

〜蝦夷地開拓と大野丸〜

幕末に大野藩が藩の命運をかけて取り組んだ事業、それが蝦夷地開拓と洋式帆船「大野丸」の建造です。



内山隆佐肖像
(大野市歴史博物館蔵)



内山良休肖像
(大野市歴史博物館蔵)

当時、大野藩は全国の諸藩同様、莫大な借財に苦しんでおり、藩主、土井利忠は、内山良休と隆佐の兄弟を抜擢し、改革に当たらせました。兄、良休は主に銅山などの産物や財政を受け持ち、弟の隆佐は蝦夷地開拓を任せられました。良休は、安政2（1855）年に、藩直営の商店、大坂大野屋を開設。その後、これを全国に広げ、着実に財政再建を進めていきます。一方、隆佐は、同年冬の幕府の蝦夷地開拓奨励を受け、良休らとともに利忠に応募を進言。4万石の大野藩が、新しい領地を得るための新事業に乗り出したのです。安政3（1856）年、隆佐は30余名からなる探検隊を率いて現地に行き、調査。開拓の人員・

資材、交易品運搬のため、外洋を航行できる洋式帆船が必要との結論に至ります。隆佐は、幕府の許可を得て船の建造に着手し、安政6（1859）年3月に敦賀・箱館間を初航海しました。当時、洋式船の建造は全国的にほとんど例がなく、大藩でもできないことを小藩が成し遂げたと「出群の所置（群を抜いている）」と称されました。名前は、利忠が「大野丸」と命名。製造費用は、蝦夷口掛硯日払帳によれば、7,239両（現在のお金で約2億円）で、大野屋の売上金から支払われたといえます。隆佐の蝦夷地開拓の戦略をうかがい知れるエピソードが残っています。隆佐は、今年はともかく来年からは「損失」が出ることはなく、大野屋と大野丸・奥地開拓がうまく噛み合えば、結局「大利」を得る」と見通していました（内山隆佐書状）。安政3（1856）年に箱館大野屋を開設し、翌々年、北蝦夷西海岸の開拓が許可されたことで、交易と開拓の両輪で事業を進めていくことになりました。開拓の収支はトントンだったといわれていますが、隆佐が見通したとおり、箱館大野屋での交易は、明治6（1873）年までの17年間で約2万両の利潤を上げました。大野丸は、大野産の米やたばこのほか、

反物・和紙・漆器などを蝦夷地に運び、地場産業の育成にも貢献したのです。万延元（1860）年、ついに、北蝦夷西海岸が大野藩準領地となります。その4年後、隆佐は病気で亡くなりますが、開拓は明治2（1869）年まで継続されました。日露戦争後から第二次世界大戦までの間、日本の領土だった樺太。大野藩の人々が苦心した足跡は、当時、樺太庁により鶴城史蹟として指定され、しっかりと樺太に刻まれていたということです。

関連史料・ゆかりの地

武家屋敷 内山家



大野藩の財政再建に尽力した内山兄弟。二人の偉業を偲ぶため、後の内山家の屋敷を解体復元し保存した建物です。庭園を眺めながら、お茶が楽しめます。

【住所】大野市城町10-7（JR越前大野駅から徒歩15分）